

| | |
|---------------------------------|----|
| 1 | 言葉 |
| 言葉の力をつけよう（音読1年③） 〔古典落語「時そば」〕 | |
| 名 | 前 |

古典落語は、寄席といわれるステージで、特別な音響や、舞台装置、衣装や道具、音曲（三味線などの楽器や歌）などをなるべく使わず、たった一人で、身振りと言りで演じます。そのため、話し方や間の取り方が重要になってきます。最初は読みにくいかもしれませんが、毎日練習すれば、すらすらと読めるようになり、音読の楽しさを味わえます。次の「時そば」は、古典落語の有名なものです。音読に挑戦してみましよう。

やってみよう

昔は夜になりますと、天秤棒で荷をかついだそば屋が、江戸の町々を流したものでございます。
ある晩、屋台で一人の男がそばを注文しました。

男1 「出てきたそばを受け取って」おまえの所はいい 井を使っているね。ものは器で食べさせるというけれど、器がよければ多少中身はますぐっても・・・（つゆを一口飲んで）おつ、うまい。いいだしをつかっているねえ。（ふうふうふきながらそばをすすり込む）さで（そばも細くっていいねえ。江戸前のそばはこうでなくっちゃいけない。ああ、うまかった。いくらだいたい。」

そば屋 「十六文いただきます。」

男1 「手を出しな。」

そば屋 「へえ（両手を出して）、これへ願います。」

男1 「一文ずつお金を出すように」ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ、・・・何刻だいたい。」

そば屋 「へえ、九つで。」

男1 「十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。ごちそうさま。」

勘定をはらって、そのまんま、ぶいっで行ってしまいました。さて、これを少々のんびりした男が見ておりました。

男2 「べらべらお世辞ばかり並べて、嫌な男だ。なんだい、あいつは。『いくらだいたい。』って、そばは十六文に決まっているじゃないか。そのうえ、子どもみたいな数え方するなんて。『ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ・・・何刻だいたい。』待てよ。あの男、変なところで刻をききやがったな。なにもあんなどこで刻をきくことはねえじゃねえか。（数えるまねをして）『ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ何刻だいたい。』『へえ、九つ。』『十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。』・・・あれっ、おかしいな。もう一回やってみよう。いつ、むう、なな、やあ、何刻だいたい。九つ。十、十一、十二、十三・・・あいつ、うまくごまかしたんだ、よし、おれもやってみよう。」

この男、早くやってみたくてしょうがなくて、わざわざ細かい銭を用意して、明くる晩、早目に出かけました。やってきたそば屋を呼び止め、そばを頼んで食べ始めるのですが、これがまた、とんでもないそばで・・・。

この後の話は、どうなると思いますか。男2は、「何刻だいたい」というタイミングを間違えてしまい、結局四文損をしてしまうという笑い話です。